

## 城西大学におけるスチューデント・ インターンシップ事業への取組み

北川 浩子

### 要 旨

城西大学では女子栄養大学とともに坂戸市及び坂戸市教育委員会の協力のもと、平成18年度より「坂戸市スチューデント・インターンシップ事業」を通して坂戸市内の小・中学校へ学生を派遣している。この事業における取組みや実施体制を示し、平成18年度から5年間の事業の運営状況と理学部における学生の活動状況について報告する。そのアンケート結果からは多くの学生が教育実習や教員になることへの不安が解消され、自身の目標が明確になったことが示され、そしてそれが化学科における教員採用試験での合格につながることを示唆された。

キーワード：学校インターンシップ、教員養成、資質向上

### 序 論

これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～の答申（平成27年12月21日）において「学校インターンシップや学校ボランティアなどの取組みは学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握するための機会としても有意義であると考え。」と提言されている。それを受け、同年に発表されたコアカリキュラムでは、学校インターンシップを「教育実習」の一部として位置付けている。このように実践的指導力の基礎の育成に対して学校インターンシップや学校ボランティアが重要視されるようになった背景には、平成9年、教育職員養成審議会「新

たな時代に向けた教員養成の改善方策について」において実践的指導力につながる資質能力を促進する視点として各種のふれあい体験の機会の充実を図ることが取り上げられて以来、「今後の教員養成・免許制度の在り方について」（平成18年7月11日答申）や教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（平成24年8月28日答申）においても学校インターンシップや学校ボランティアの実施の必要性が示されている。それにより、今日では学校ボランティアや学校インターンシップへの取組みが多く教員養成大学で様々な形態で行われている。その活動の調査や研究結果（酒井，2016）が蓄積し、それら活動が資質能力の向上に対してある一定の成果が上がることを示されていることによって、現在では上記に示しているような位置づけへと進展してきたと考えられる。

このような状況にある中、城西大学では平成18年3月23日に坂戸市との間で「坂戸市スチューデント・インターンシップ事業に関する協定書」を

締結し、平成18年度より坂戸市教育委員会の協力のもと坂戸市立小・中学校へ学生を派遣している。今年度で11年目を迎えたこの事業は、大学と坂戸市教育委員会、各小・中学校だけでなく、坂戸市の様々な方のご尽力により、継続してこられたものである。経年にわたるその取組みを多くの方々から理解していただくことは、城西大学における教職課程の発展につながると考えられることから、事業を始めるにあたっての背景や経緯について、また平成18年から22年度までの5年間での取組みなどについて報告する。

### 【1】「スチューデント・インターンシップ事業」発足までの経緯

理学部では教職課程を履修している学生の割合が多く、自分は教師として向いているかどうかや教員採用試験においてボランティアをしていないと不利なのではないかなど迷いや不安を抱える学生からの相談が寄せられるようになった。当初は母校でのボランティア活動を推奨していたが、理学部の学生は大学で過ごす時間が多いことや通学時間等を考えると自宅近隣の学校でのボランティアを行うのが困難であった。大学周辺で行う学校があれば講義等への支障をきたすことなく教育現場を体験することができるということから、近隣の中学校である城山中学校にボランティア受入れの相談をしたところ、坂戸市学校支援ボランティアとして活動する機会が与えられた。学生の活動に対し、中学校側から今後も継続していきたいとの申し入れがあり、双方にとって良い活動であることが認識されるようになった。その後、坂戸市教育委員会との話し合いの場が設けられ、坂戸市としては児童、生徒の学力向上をはじめとする「生きる力」の育成のために、大学としては自らの教員としての適格性を理解し、実践的指導力の基礎の育成のためにインターンシップ事業導入を

検討していった。平成17年には市内小、中学校への学校支援ボランティア活動を通して現場の先生方への理解と協力を求めると同時に、坂戸市スチューデント・インターンシップ事業準備委員会が発足し、坂戸市、坂戸市教育委員会、女子栄養大学、城西大学の間で協議が行われた。準備委員会では「坂戸市スチューデント・インターンシップ事業実施要領」(以下、実施要項)、「坂戸市スチューデント・インターンシップ事業推進委員会設置要綱」(以下、設置要綱)、「スチューデント・インターンシップ事業手引書」(以下、手引書)等の作成が行われた。また、実施要領に基づき坂戸市教育委員会、市内小、中学校、大学における役割等をリーフレット(図1)にして配布することによって、各部署への周知を促した。

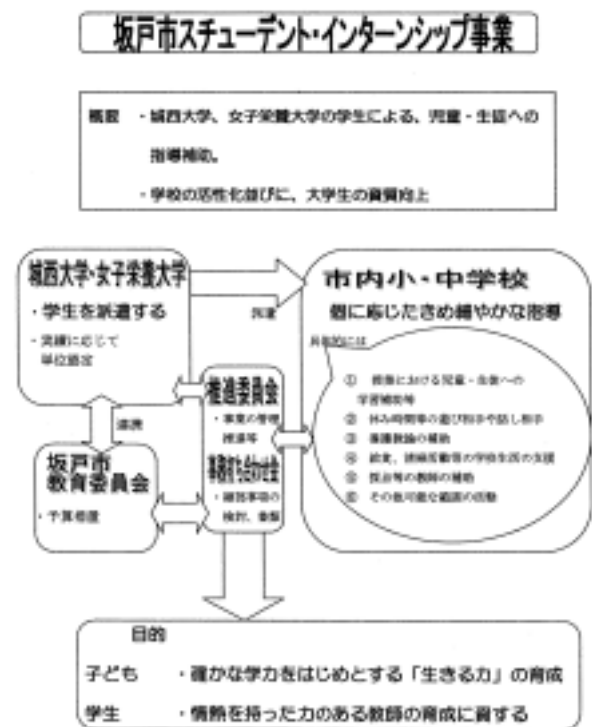


図1. スチューデント・インターンシップ事業のリーフレット

## 【2】「スチューデント・インターンシップ事業」

### （1）実施要項について

〈目的〉地域の大学（城西大学・女子栄養大学）の若い力を活用し、児童・生徒へのきめ細やかな指導に対する教師の補助を行うとともに、これからの学校教育を担う、情熱を持った教師の育成に資することを目的とする。

〈定義〉坂戸市スチューデント・インターンシップ事業とは、坂戸市と城西大学並びに女子栄養大学との間で協定を締結し、坂戸市立小、中学校長の求めに応じて、学習及び生活指導等の教育活動の指導に対する教師の補助を行うための大学生を派遣するものである。

〈活動期間、時期〉学生の派遣は1年以内とし、派遣した日の属する年度の末日までとし、活動時期は、該当校と大学で協議し、毎週決められた曜日で決められた日数を原則とする。

〈活動時間〉次のように区分するが、学生個々の状況によって、調整可能とする。

- （1） 8：30～12：30（昼食）
- （2） 10：30～（昼食）～14：30
- （3） 12：30～（昼食）～16：30
- （4） 8：30～（昼食）～16：30

〈活動内容〉以下のとおりであるが、具体的な活動内容については、該当校と大学で協議して決定する。

- （1） 授業における児童・生徒への学習補助
- （2） 休み時間や昼休みの遊び相手や話し相手
- （3） 養護教諭の補助
- （4） 給食、清掃活動等の学校生活への支援
- （5） クラブ、部活動等の教師の補助

### （2）坂戸市スチューデント・インターンシップ事業推進委員会（以下、推進委員会）について

推進委員会は事業の推進及び進行管理を行うために設置され、坂戸市教育委員会教育長、坂戸市教育委員会教育部長、坂戸市教育委員会指導主事、坂戸市PTA連合会会長、小学校長代表1名、中学校長代表1名、小学校教頭代表1名、中学校教頭代表1名、女子栄養大学教員3名、城西大学教員3名によって構成され、平成18年度は表1に示す委員で組織された。

表1. 平成18年度 坂戸市スチューデント・インターンシップ事業推進委員

職名	氏名
坂戸市教育委員会教育長	武藤 和親
坂戸市教育委員会教育部長	吉本 祐一
坂戸市教育委員会指導主事	中島小津江
坂戸市立千代田小学校長	福島 美彦
坂戸市立浅羽野中学校長	渡邊 俊雄
坂戸市立坂戸小学校教頭	井上 貢一
坂戸市立若宮中学校教頭	高桑 昌作
坂戸市PTA連合会会長	篠崎 仁美
女子栄養大学栄養学部教授（養護）	鎌田 尚子
女子栄養大学栄養学部助教授（養護）	遠藤 伸子
女子栄養大学栄養学部教授（家庭科）	小澤 滋子
城西大学理学部数学科教授	西沢 清子
城西大学理学部化学科講師	北川 浩子
城西大学経営学部助教授	栗田るみ子

### （3）年次計画について

推進委員会では1年間のスケジュール（表2）に則って事業が進行するように大学、教育委員会及び小、中学校との連絡調整に関する業務を行うこととする。

表2. 平成18年度 スチューデント・インターンシップ事業のスケジュール

	坂戸市教育委員会	市内小、中学校	大学
3月		派遣要請書提出	
4月	市内小、中学校への配置 大学での説明会		学生募集・学生名簿及び応募調書の提出
5月	スチューデントインターンシップ事業の開始		
6月	実施状況把握（学校訪問）		実施状況把握（学校訪問）
7月	推進委員会（状況把握）	推進委員会（状況把握）	前期活動報告 推進委員会（状況把握）
8月			
9月			後期活動内容連絡会
10月			
11月	推進委員会（課題検討）	推進委員会（課題検討）	推進委員会（課題検討）
12月	アンケート調査依頼	アンケート調査(子供、教職員)	アンケート調査（学生）
1月	事務打合せ(アンケート集計)	事務打合せ(アンケート集計)	後期活動報告 事務打合せ(アンケート集計)
2月	推進委員会（課題検討、今後に向けて）		

### 【3】城西大学での取組み

准教授）では平成20年度から実施した。

#### （1）インターンシップ実施概要

平成18年度に理学部・数学科（担当教員は西沢清子教授）ではスチューデント・インターンシップⅠ、Ⅱを2年次、スチューデント・インターンシップⅢ、Ⅳを3年次に開講した。理学部・化学科（担当教員は北川浩子講師）では平成19年度にスチューデント・インターンシップⅠ、Ⅱを2年次に開講した。経営学部（担当教員は栗田るみ子

年間スケジュールに従い、理学部では以下のような流れでインターンシップを実施した。

- 1) ガイダンス及び事前指導（3月～4月）  
・インターンシップ生の募集

オリエンテーションでのガイダンスを行う。そこでは事業の目的を理解させると同時に講義の一環であることから週1回以上1年間を通して行うこと、教師ではないが、あくまでも教師としての

心構えを持って行動することなどの講和を行った。特に現場の先生の迷惑になることや（無断欠席、遅刻、早退など）児童生徒に影響を与えるような身なり、行動、言動等については事例を交え、説明する。

#### ・インターシップ生の選抜

教場での授業の学習補助を行うことになるので、数学科では数学の、化学科では理科のテストを行い、インターシップ生の選抜を行う。

#### ・応募調書の作成

担当教員と相談のもと、活動時間、曜日、時間帯、配置希望校（3校）等を決め、学生各自で応募の動機や自己アピールなどを作成する。応募調書は担当教員の添削後に坂戸市教育委員会にまとめて送付する。

#### ・スチューデント・インターンシップ実習日誌について

日誌は事前指導、事前打ち合わせ、1日の実習活動を記載する記録簿を記載項目としており、記録簿には各回で行った実習内容、その活動で学んだことや反省点及び次回への課題等を記載内容としている。また、教育委員会説明用手引き「坂戸市スチューデント・インターンシップ事業活動の手引き（学生用）」及び提出書類として応募調書、実習生出勤簿、アンケート用紙を含んでいる。

#### ・配置校の決定と坂戸市教育委員会によるガイダンス

坂戸市教育委員会では大学生から提出された応募調書の配置希望校と小、中学校から提出された派遣要請書から学生の配置校を決定する。また、坂戸市教育委員会から大学に来校いただき、坂戸市スチューデント・インターンシップ事業活動の

手引き（学生用）を用いて、インターンシップ事業の趣旨や活動についての注意点等の説明がされる。

#### ・配置校との事前打ち合わせ

1つの配置校に複数人数の学生がいる場合は代表者を決め、配置校との連絡係とし、事前打ち合わせの日程調整を行う。事前打ち合わせ（5月休明けに行われる）では活動曜日、時間、持ち物などの確認と活動内容について説明を受け、わからないことなどを質問する。

#### 2) インターンシップ活動（5月～12月）

活動は基本的に配置校との打合せの翌週から始まり、大学の前期終了の時期で活動を中断する。教育委員会及び担当教員は活動中（6～7月）に視察訪問をし、状況を把握する。学生は前期終了時までにサマースクール等への参加や9月からの開始予定の打合せをする。前期の活動が終了した学生は日誌と出勤簿を担当教員に提出する。担当教員は後期活動前に日誌と出勤簿を返却すると同時に日誌の書き方や内容について助言する。大学の後期終了の時期を活動終了とし、日誌と出勤簿及びアンケートを担当教員に提出する。担当教員は前期、後期ともに日誌と出勤簿により単位認定を行う。

#### 3) インターンシップ活動報告（1月～2月）と次年度打合せ

アンケートを集計し、その結果をもとに推進委員会にて今後の方向性や改善点などについて話し合う。

### （2）平成18年度から22年度の活動報告

#### 1) 人数及び配置校について

活動人数を表3に、城西大学生の配置校別の人数を表4に示した。表3に示すように、城西大学

では年30名程度であることから坂戸市内の10校ほどの学校に配置されている。小学校では大家小学校と城山小学校，中学校では浅羽野中学校と城山中学校への配置が多いことを示した（表4）。学生は学校からの距離や通学経路から希望校を選択しており，そのため，大学の裏手にある城山小，中学校，西大家駅付近にある大家小学校，坂戸駅から徒歩圏内の浅羽野中学校への配置が多くなる

表3. スチューデント・インターンシップ活動人数

平成	18年	19年	20年	21年	22年
城西大学	23	27	28	18	41
女子栄養大学	88	77	149	125	46

表4. 配置校とその人数

学校名/年度 平成	18年	19年	20年	21年	22年
坂戸小学校		3			1
三芳野小学校					
勝呂小学校					
入西小学校		1			
大家小学校	1	3	1	2	5
城山小学校	5	5	6	2	6
浅羽野小学校	2	1	2		1
北坂戸小学校					
千代田小学校					
泉小学校	2	1			
片柳小学校					
南小学校		1			1
上谷小学校					
坂戸中学校	3	2	5		
住吉中学校				1	1
若宮中学校	2		2	1	2
北坂戸中学校	3	3			4
城山中学校		4	6	5	4
千代田中学校	1				4
浅羽野中学校	3		6	6	10
泉中学校	1	3		1	2

と思われる。また，女子栄養大学は若葉付近の学校への希望が多く，小，中学校への配置人数のアンバランスが毎年問題となるが，解決策が見いだせない状況である。

## 2) アンケートについて

学生へのアンケートは女子栄養大学と城西大学に対して行われるが，今回の報告では城西大学理学部のインターンシップ事業に参加した学生のアンケート集計結果を示した（表5）。また，記述式アンケートとして，「総合的に考えて参加して良かったか」の回答に対する理由，「あなたに対して小，中学校の対応はどうでしたか」，「感想」についての内容を示した。

子供との対応の仕方を学ぶことや先生の指導方法を学ぶことを目的としている学生が多くを占め，その目的はほぼ達成できたということが示された。これはほとんどの学生が教場での学習補助を行えたことによると考えられる。その一方で活動中に困ったことがあるかの問いに初年度は全員が困ったことがあると回答している。その内容としては①何をしてよいかわからない。②児童生徒への注意の仕方がわからない。③児童生徒が言うことを聞いてくれない。④大学の授業があるので行く時間が短い。⑤先生とのコミュニケーションが取れない。⑥やりたくないことをさせられた。⑦先生や児童生徒に紹介されなかった。などが挙げられた。これらのうち⑤～⑦については小，中学校側との話し合いの中で改善されていったが，次年度以降も半数以上の学生が困ったことがあると答えており，その理由のほとんどは①～③であった。これらのことは困ったことではあるが勉強になったことでもあることが記述式アンケートの内容からも読み取れる。大学生にとっては総合的にこの活動から得られるものが多く，教育効果があることが示された。

表5. アンケート集計結果 (%)

参加した目的 (複数回答)

平成	18年	19年	20年	21年	22年
子供との対応の仕方を学ぶ	78	93	100	83	88
子供の実態を知る	89	67	78	67	46
先生の指導方法を学ぶ	89	85	100	83	79
教育実習への不安を軽減させる	44	41	28	67	38

目的は達成できたか

平成	18年	19年	20年	21年	22年
充分できた	11	33	17	33	54
できた	89	63	83	67	46
合計	100	96	100	100	100

活動の内容 (複数回答)

平成	18年	19年	20年	21年	22年
学習補助	100	96	100	100	92
休み時間の遊び相手や話相手	44	52	50	33	42
給食、清掃活動等の補助	11	22	22	33	25
部活動等の教師の補助	11	15	11	0	29

活動中に困ったことがあるか

平成	18年	19年	20年	21年	22年
ある	100	59	44	67	63

総合的に考えて参加して良かったか

平成	18年	19年	20年	21年	22年
良かった	89	93	100	100	100
どちらとも言えない	11	7	0	0	0
良くなかった	0	0	0	0	0

記述式アンケート

「総合的に考えて参加して良かったか」の回答に対する理由

- ・勉強になった。
- ・当初考えていた以上得るものがあった。
- ・教育実習に生かせそう。
- ・たくさんの先生、生徒と話すことが出来た。
- ・自分のためになった。
- ・自分の成長を実感した。
- ・実践的指導を学ぶことが出来た。
- ・学校にいられる時間が少なかったので、授業に参加できる機会が少なかった。
- ・先生がとても親切に教えてくれた。
- ・いろいろな子供と接することができた。
- ・様々なことが学べ、とても楽しかった。
- ・生徒と仲良くなりより一層教員になりたいと思った。
- ・工夫して教えることが大事だと思った。
- ・様々な体験を積みきっかけになった。
- ・教育実習の参考になった。
- ・子供たちとのふれあいや教え方が少しわかった。
- ・大学では学べないことを学べた。
- ・指導方法を学べたことはとても大きい。
- ・より将来の自分の夢をはっきりさせることができた。
- ・どうすれば児童が勉強に対してやる気を出してくれるのかということが少しわかった。
- ・参加しなければわからないことがあったから。
- ・教員に対する不安が軽減できた。
- ・自分の目標が達成できた。
- ・教育実習に行く前に多くのことを学べた。

あなたに対して小、中学校の対応はどうでしたか

- ・とても親切に対応していただいた。

- ・指導の仕方などいろいろ教えていただいた。
- ・様々な行事にも招かれ、子供たちと多く関わることができた。
- ・大学の都合に合わせてもらった。いろいろな体験をさせてもらえた。
- ・先生、生徒にあったときにあいさつをしてくれた。
- ・授業もしっかりと組んでくれたし、内容についても説明してもらえた。
- ・殆どの先生が助かったと言ってくれた。
- ・生徒に又来てねと言われた。生徒たちが良い子ばかり。
- ・お客さん扱いされている感じがした。
- ・もう少し授業に参加させてほしかった。
- ・年間の予定表がほしかった。
- ・受け入れる準備ができていないように感じた。

#### 感想

- ・学校や児童生徒の実際を知り、自分が将来教員として働く際の具体的なイメージを持つことができ、日々の勉強の目的や目標がはっきりしました。
- ・この事業に参加して自分は教員に向いていないと感じました。しかし実際の教育現場を体験できてとてもためになりました。
- ・最初は生徒とどう接したらいいかわからなかったが、慣れてきたらうるさい時などに注意できるようになりました。
- ・始めは不安なことが多くあったが、子供たちとの触れ合いの中で接し方や教え方が次第にわかってきました。貴重な体験ができて良かったと思いました。この体験を次につなげたいです。
- ・後期には相談室の生徒と関わったり、授業を教えたり、たくさんの経験ができました。生徒の中に入って行くのが難しかったりしたが、質問に来てくれる子もいて楽しい活動ができました。

- た。
- ・身近で先生方の仕事を体験でき、かつ子供たちと多く関わることができてよかったです。また学校独自の行事にも参加できたので、楽しい時間を過ごすことができました。
- ・多くの児童に接することができました。自分は授業を中心に見るつもりだったが、生徒とのコミュニケーションをとるほうが必要だということに気づきました。
- ・私がこの事業に参加した目的は児童・生徒とコミュニケーションをとることと授業の展開を学ぶことでした。少ない時間でしたが児童と遊んだり話したりすることで接し方がわかるようになったと思います。また、授業の補助をすることで、子供たちがどこで悩んでいるのか、また、そういった時の教師の指導方法を学ぶことができ、貴重な経験をさせていただきました。これから将来に向け精進していきたいと思いません。
- ・大学の1コマ分だと学校での2時間分しかいられないので担当する教科が限られてしまう。

#### 【4】インターシップ事業の課題

アンケートは大学生だけでなく小学生、中学生、小、中学校教員、保護者に対しても行われており、その調査結果をもとに推進委員会では今後の方向性や改善点などについて話し合っている。大学生へのアンケート結果からは上記に示したように有意義な活動であったとしても、受入れ校の教員にとってはかなりの負担を強いられていることが考えられる。特に平成21年度まで女子栄養大学のインターシップ生の増加(表3)が現場の先生方の負担増につながり、この事業の意義を感じる教員数が減少した。それを受け平成22年度は女子栄養大学のインターシップ生を2年生以上にすることによって人数を制限し、受け入れ態勢の構



築に柔軟に取り組めるよう配慮した。

また、アンケートにおける学生に対する評価はインターンシップ生の数が女子栄養大学の学生が多いことから（表3）、その評価が城西大学生に対してであるかが不明確であると考えられた。城西大学理学部では6月～7月に受入れ校に視察に行き、事業に対する理解・協力を求めると同時に、先生方から意見を聞く機会を設けた。ここでは大学での学生の時間割からインターンシップでの滞在時間が少ないことへの理解を求めることや、具体的にどのように参加し、対応させて良いのかなどの事例等を聞くことによって、事前、事中指導へとつなげることができた。しかし、滞在時間の短いことから、打合せがうまくいかない、何をさせて良いかわからない、日程調整が難しい、児童・生徒に紹介していないことなど今後解決していかなければならないこともある。また坂戸市外から転入してきた教職員にとっては初めての経験になることから事業に対する理解を求めていく努力が必要であることや、保護者の方への周知もうまく機能していなかったことへの対応も今後の課題であると考えられる。推進委員会ではこれら課題の解決案を提示し、各部署への対応を求めた。この5年間での取り組みは教育委員会、小、中学校、大学教員がそれぞれの立場でいろいろな改善を行なっていった。今後もお互いの立場を理解し、さらにより良いものにしていくための努力が必要であると思われる。

### 【5】化学科におけるインターンシップ導入と教育効果について

化学科では毎年10～20名の教員志望の学生がいるが、採用試験の現役合格者は平成14年度に1名輩出した後出ていなかった。卒業後臨時採用を経て教員になっている学生はいるが、採用試験に合格するまでに時間を要している。そんな中、平成

表6. 化学科における教員養成の動向

インターンシップ参加年度	平成	19年	20年	21年	22年
卒業年度	平成	21年	22年	23年	24年
インターンシップ参加		13	8	0	8
免許取得者：インターンシップ参加		9	5	0	5
免許取得者：インターンシップ不参加		3	6	9	3
教員採用試験（現役合格）		0	0	0	3
教員採用試験（既卒合格）		7	1	1	1
私立教員		0	0	0	1
教職系大学院進学		0	0	0	1

19年度から学生をこの事業に参加させている。

表6に示すように、この4年間で免許取得者に対し、インターンシップに参加している数が多い年（参加年度19年及び22年）は比較的教員になっている割合が高いことを示した。平成19年度にインターンシップに参加した13名（免許取得者9名）のうち7名（既卒）が、平成22年度では8名（免許取得者5名）のうち4名（現役合格者2名、既卒合格者1名、私立高校1名）が教員になっている。また、インターンシップにおいて養護教諭の補助をした学生は理科の教員ではなく、養護教員を目指すケースもあった。このようにインターンシップに参加することによって、学生本人が早くから目的意識を明確にして採用試験に臨めるようになったと思われる。

**【参考文献】**

- ・これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～の答申（中央教育審議会 平成27年12月21日）
- ・新たな時代に向けた教員養成の改善方策について（教育職員養成審議会・第1次答申 平成9年7月1日）
- ・今後の教員養成・免許制度の在り方について～の答申（中央教育審議会 平成18年7月11日）
- ・教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について～の答申（中央教育審議会 平成24年8月28日）
- ・教職志望学生による学校インターンシップ事業の実態と課題, 酒井 研作, 比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究 2016年3月, 2巻 p.55-62

**An Approach to Student Internship Program in the Josai University**